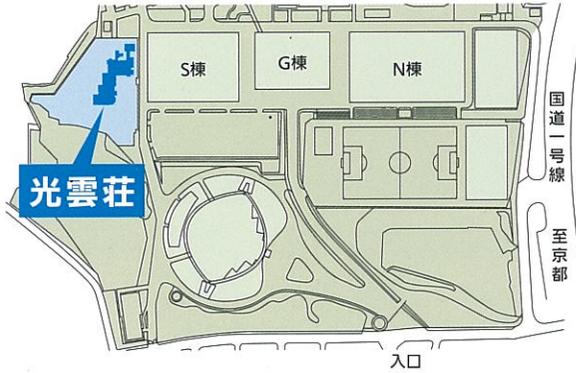


パナソニック株式会社 人材開発カンパニー

# 光雲荘

大阪府枚方市菊丘南町2番10号

Tel.072-844-1402 Fax.072-844-0528



## 創業者の森 [非公開]



光雲荘跡地(西宮市)

## 創業者の関連施設

### ■ パナソニックミュージアム 松下幸之助 歴史館

〒571-8501 大阪府門真市大字門真1006

Tel.06-6906-0106 Fax.06-6906-1894

開館時間 / 9:00~17:00

休館日 / 日・祝日および会社休日

入場料 / 無料

駐車場 / 乗用車4台、大型バス6台収納可能

<http://panasonic.co.jp/rekishikan>

### ■ 松下資料館

〒619-0223 京都府木津川市相楽台3丁目1-1

ハイタッチリサーチパーク東ブロック内

Tel.0774-72-7776 Fax.0774-72-8751

<http://matsushita-library.jp/>

- 無断での転載はお断りいたします。
- 記載内容は2010年5月現在のものです。



ミックス品  
FSC認証済み原料を使用した  
森林からの製品グループです

Cert no. SGS-COC-003822  
[www.fsc.org](http://www.fsc.org)  
© 1996 Forest Stewardship Council

Panasonic  
ideas for life

日本語

# 光雲荘

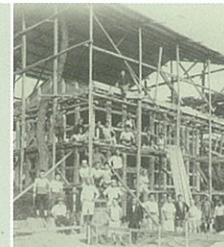


創業者 松下幸之助の心に触れる



## 光雲荘の沿革

光 雲 荘	社 史
1918 大正7	■創業
1929 昭和4	■綱領・信条を制定
1932 昭和7	■第1回創業記念式典挙行
1933 昭和8	■事業部制を導入
1935 昭和10	■松下電器産業株式会社 に改組
1937 昭和12	■西宮市名次町に建設 (昭和12年 3月着工) (昭和14年12月竣工) お茶会開催
1946 昭和21	■GHQより7つの制限を受ける (1950年までに解除)
1950 昭和25	■初めて欧米を視察
1951 昭和26	■フィリップス社と提携
1952 昭和27	
1954 昭和29	
1955 昭和30	■アメリカ向けスピーカーの 輸出に、初めて「Panasonic」 ブランドを使用
1956 昭和31	■五ヵ年計画を発表
1959 昭和34	■アメリカ松下電器設立
1961 昭和36	■創業者 会長に就任
1964 昭和39	■熱海会談開催
1965 昭和40	■週5日制を導入
1973 昭和48	■創業者 相談役に就任
1979 昭和54	■創業者 中国を訪問
1989 平成1	■創業者逝去
1995 平成7	
2008 平成20	■阪神・淡路大震災で 被害を受ける
2009 平成21	■創業者90周年 パナソニック株式会社に 社名を変更



■西宮市名次町に建設  
(昭和12年 3月着工)  
(昭和14年12月竣工)  
お茶会開催



■大広間で仮通夜営まれる

■阪神・淡路大震災で  
被害を受ける

■枚方市へ移築  
■研修施設として  
オープン



## 光雲荘のあゆみ

光雲荘は、兵庫県西宮市名次町に、松下幸之助創業者の私邸として、1937年(昭和12)春に着工し、足掛け3年の歳月をかけて1939年(昭和14)秋に完成。松下家の公私にわたるおもてなしの場としてお得意先や賓客の接待などに使われました。1950年(昭和25)にパナソニックの所管となり、以後、迎賓館として内外の多数のお客様を迎えてきました。建築にあたって創業者は、設計を新聞広告で公募したり、細部にわたって何度も変更を加えるなど、情熱を注ぎました。1995年(平成7)1月の阪神・淡路大震災で、大広間や茶室などが倒壊する被害を受けましたが、同年5月から復旧工事に着手し、1996年(平成8)8月には、当時の姿が復元されました。

## 移築の思い

2008年(平成20)、創業90周年を迎えた当社は、より一層グローバルに、社会の発展に貢献し続ける決意を新たに、パナソニックに社名を変更、ブランドも統一しました。そして、これを機に、西宮市(兵庫県)から枚方市(大阪府)の人材開発カンパニーに移築し、創業者の心を感じて学ぶ場(研修施設)としました。西宮市の跡地は「創業者の森」として、移築後も整備され、当時の雰囲気を漂わせています。光雲荘は、不変である経営理念や創業者の精神をグローバル社員全員で共有し力強く実践していくための、一つの拠り所となるでしょう。



還暦を迎えた創業者は、1954年(昭和29)、  
光雲荘を社長役宅としました。  
当時の社内報で、その時の心境を語っています。

### 実業に奉仕して50年(社長、最近の心境を語る)より

#### 深く人生を思索する時

私自身としても、60の  
齢をこえたいま、ふか  
く人生を検討しなけれ  
ばならない大切な  
時であると考えます。  
又、仕事についても、  
50年の間、一途に励ん  
でまいりましたが、こ  
こに円熟の美を加え  
ねばならないと思う  
のです。そして人生と  
事業の両面に、よりよ  
き発展をみちびくため、  
大いに思索を積みねばならないと  
感じるのであります。私が、こん  
ど勤務の体制をかえて西宮の役宅に  
移つたのも、思いをここに  
たてたものなのであります。



「社内時報」1954年(昭和29)

#### 澄んだ環境で考えるよろこび

正式に光雲荘を社長役宅とし、すでに旬日をこえています  
が、緑につつまれた環境は澄んだ空気とともに、心気おのづから  
爽やかさをましております。そしていま、私はここにあって、  
ひろく社会に貢献する思索の道をひらきたいと、かつてない  
よろこびの心に満ちているのです。必ず、皆さんのよき活動  
によりよく寄与できる方策が、生まれてくると信じております。  
そのために、なにを考え、なにを為すべきかでありましたが、こ  
こで思うことは世のなかの姿についてであります。



フィリップス社来訪  
社長役宅以降、フィリップス社  
をはじめ多くの賓客を迎え、  
家族ぐるみでもてなした。

### 光雲荘雑記より

#### 雲の姿を仰ぎ見給え

時には静かに流れ  
ゆく雲の姿を仰ぎ  
見給え。

速くおそく、大きく  
小さく、白く淡く、  
高く低く、ひとときも同じ姿を保ってはいない。崩れるが如  
く崩れざるが如く、一瞬一瞬その形を変えて、青い空の中ほ  
どを、さまざまに流れゆく。これはまさに、人の心、人のさだ  
めに似ている。喜びもよし、悲しみもまたよし、人の世は雲の  
流れの如し。

そう思い定めれば、あるいは人の心の乱れも幾分かはおさま  
るかも知れない。そして、喜べども有頂天にならず、悲しめども  
徒らに絶望せず、こんな心境のもとに、人それぞれにそれ  
ぞれのつとめを、謙虚に真剣に果たすならば、そこにまた、人  
生の妙味も味わえるのではなからうか。ながめてあきぬ雲の流  
れ、味わってつきせぬ人の世のさだめ、そんなことを、私は光雲荘  
の庭に立ってシミジミと考えるのである。



# 心

#### 一万人の社長さん

一万人の従業員がいる松下電器では、一万軒の商店が店を出し、  
一万人の社長がいて、それが互いに腕を競い、技を磨き、良き  
製品をつくり、良き販売に努力していることになる。そして、  
それぞれの成果が結集されて、松下電器全体の繁栄が築き上  
げられていく。何という見事な楽しいことであろう。お互いに  
正しく気持ちよく、懸命に競争をしよう。  
真剣な態度で、われわれの腕を磨き、技を練ろう。

#### 歴史の一コマに生きる

松下電器の仕事は、松下電器ひとりのためにあるのではない、  
社会のために、松下電器を通して私たちは与えられた職責を全う  
するのだ、という一つの結論に達している。これが社会人としての  
義務であり、責任であり、また本当に尊い仕事ではなからうか。



### [綱 領]

産業人たるの本分に徹し、社会生活の改善と向上を図り、  
世界文化の進展に寄与せんことを期す

### [信 条]

向上発展は各員の和親協力を得るに非ざれば得難し、  
各員至誠を旨とし一致団結社務に服すること

### [私たちの遵奉すべき精神]

- 産業報国の精神
- 公明正大の精神
- 和親一致の精神
- 力闘向上の精神
- 礼節謙讓の精神
- 順応同化の精神
- 感謝報恩の精神



主人客間にて 1954年(昭和29)



## 「三百年後の遺構に」

日本経済新聞  
1962年(昭和37)より抜粋

私はこの西宮に縁あって、昭和十二年に、西宮の山手に土地を求めて家を建てた。(中略)

この格好の場所に、今から二十五年前、この家を建てることにしたのである。そのとき私は、戦前のことでもあるし、家を建てるかぎりは少なくとも三百年はもたしたい、三百年先にも、その建物が少しもいたまないように、ということを前提として、その設計を依頼したのである。それはなぜかという、今後おそらく三百年も先には、この当時の日本建築というものが、いろんな形において、やはりいろいろと吟味されたり参考にされたりすることがあるだろう。そのときに、じゅうぶん参考に供されるような建物を建てておきたい。

三百年も先には、おそらく松下家と関係のない人が所有することになるだろうが、それはもとより問うところではない。そういう建物を建てておくことが、建てえられる者としての一つのやはり行き方ではないかという感じがした。したがって、経済的には少し高くついただけれども、そういうことを加味してこの住まいを建てたわけである。(中略)

ともかくも、三百年先の代表的な日本建築物として、その保存に努めたいと考えているのである。



光雲荘は、桃山時代に集大成された武家屋敷の建築様式である「書院造り」の中に、ホールや談話室などの洋間を取り入れた建築物です。天井、廊下、欄間、照明など、各部屋ごとにさまざまな趣向が凝らされており、創業者の「三百年後の遺構に」という思いが随所にうかがえます。



**庭園**  
四季折々の自然を堪能できます。



**オリエンテーション・ギャラリー**  
当時の光雲荘を再現したジオラマや、数々の貴重な資料を展示しています。



**蔵シアター**  
創業者と光雲荘を描いた「光雲の日々」を上映しています。創業者の思いを知るきっかけとなります。

## ■ 主人客間

昭和29年に社長室として使われ、執筆活動も行われました。



## ■ 佛間



床、天井は一段高く、書院や仏閣に用いられる格天井が、しつられるなど、先祖に対する感謝の気持ちが表れています。恩師 五代音吉氏の肖像画も飾られています。



## ■ 談話室

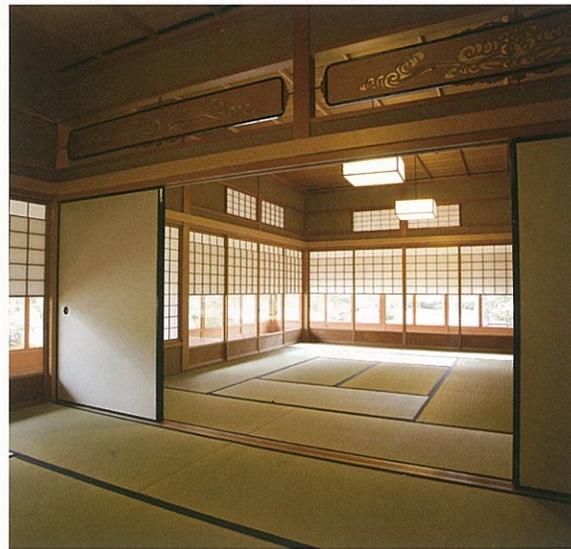


海外からのお客様をおもてなしするために、作られた洋風の貴賓室。椅子は西陣織、暖炉は大理石で作られています。



## ■ 大広間

数多くの賓客を迎え、会議や宴席など多目的に使用されたおもてなしの場です。



## ■ 茶ノ間



むめの夫人の部屋。屋敷の四方に目配りができる場所となっています。

## ■ 婦人客室



丸い木や竹を用い、柱も角がない柔らかな造りになっています。

## ■ 食堂

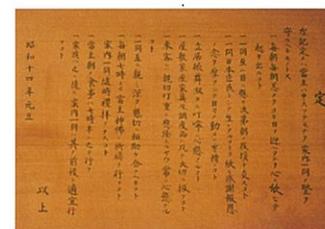


家族全員で朝食をとっていた場所です。



アールデコの照明器具は創業者自らのデザインによるものです。

## ■ 定書(玄関)



内玄関に掲げられた日常の規範を示したものです。創業者自らが昭和14年元旦に決めました。